

僕たち指導者は勉強が欠かせない。選手たちよりも10倍は勉強しないと彼らの成長に追いつけないし、人間的に成長させてあげることができない。

3月に行われた「第5回ワールド・ベースボール・クラシック（WBC）」で、野球日本代表侍ジャパンを2009年以来3大会ぶりの優勝に導いた栗山英樹監督の言葉である。大会では、大谷翔平選手をはじめ日本選手の見事な活躍があった。その陰には、栗山監督の選手を信じ切るという姿勢と采配の妙があった。

栗山監督というと、プロ野球の世界に飛び込んだ大谷翔平選手を育てた監督でもある。栗山監督は、次のようなことを言っている。

僕が特別に何かをしたから彼が育ったというわけではありません。ただ、僕が意識したのは前例がどうだとか、野球とはこういうものだとかいう先入観をいかに自分自身が払拭できるかということでした。

真っ白な感覚で大谷翔平という選手を見たときに、投手としても打者としても絶対に世界に通用することは確かでした。僕如きが自分の感覚で彼の可能性を閉ざすようなことがあってはいけない、決められるのは野球の神様だけだと思ったものですから、技術的なことはほとんど翔平に任せて、僕と球団のゼネラルマネジャー（GM）は、それを削いでしまうような要因を排除することに力を入れました。それに、彼が成長する上では、根っからの野球好きということも大きかったですね。

翔平を見ていて僕らも勉強になったのは、野球も結局は人間がやるものだということでした。人間として駄目な部分は誰が見ても駄目なわけですし、反対に欠点を改めて人間として成長していけば、野球選手としても成長していく。その手本を示してくれたのが翔平だったんです。

翔平には「野球が上手になりたい。そのためには何でもやります」というはっきりしたスタンスがありましたから、人間学の教えを含めて彼の成長のために我々はやれる限りのことをしました。

指導者としての僕の課題は自分が人間として大きくなることだと思っていますので、だからこそ過去1000年、2000年の間、様々な苦しみを味わい、それを乗り越えてきた先人たちの教えにも積極的に学んでいるわけです。

大谷翔平選手というと、何か特別なことに思えてくる。しかし、栗山監督が言っていることは、学校の教員にも当てはまるのではなかろうか。前例、先入観、払拭、可能性を閉ざす、人間学、先人たちの教えなどがキーワードとなる。

栗山監督も学校の教員も指導者である。ちなみに、栗山監督は、東京学芸大学の出身である。そう考えると、親近感がわいてくる。「僕たち指導者は勉強が欠かせない」これに尽きる。